

人間・言語・社会の相互関係

杉崎 正俊

言語の基本的性格（第一部）について

言語が人間やその社会にとって欠くことのできないものであるということは、おそらく誰でもほぼ直観的に認めることでしょう。

その「欠くことのできない」ということが、どういふ事なのかが自分の研究の出発点であり、人間・言語・社会の三者の間についてのこの考察の基本的な視点、いわば論理的な基盤を位置づけるものであるといえます。そして、それは、言語についての何らかの社会学的な考察の立脚点の一つとして、おそらく重要な基点となるといえると思います。

その基本的な視点とは、三者が一つの構造的な概念として成立していると観る点です。

そしてさらに、ここではそのような関係を成立させる

上で、言語が持つ必要のある機能、そしてその機能を發揮する言語の構造について概観し、言語を使用していく上で、おそらく重要な問題の一つである「言語の意味を決めるもの」について、その人間・社会との掛わりから考えます。

言語は人間や社会に対して二つの機能を果していると考えられます。

一つは主として諸個人間のそしてまた個人内における伝達——コミュニケーション——の道具としての機能です。この諸個人間の伝達の道具としての言語の機能はわれわれにとって極めて重要な意味を持っていると思います。つまりG・ジンメル（G. Simmel）のいうように社会関係を単なる集合・並存（Nebeneinander）の状態から区別する上での指標——相互作用の道具——方法として、つまり、人

間にとって社会化を行なう上で言語がそして言語による伝達活動がそこに属する諸個人間の相互作用においておそらく最も確実性を持つ重要な手段であつて、現実の社会的な関係のほとんどは、言語という高度な伝達機能を持つものによつて成立しているといえるであらうということです。少なくとも現実に基づく限りにおいて言語の伝達機能の存在しない社会を考えることはできないといつてよいでしょう。

もう一つは、諸個人——人間にとつての理性の道具としての機能です。理性的な行為あるいは思考が全て言語を用いて行なわれるというのではなく、それらは言語という道具を用いることによつて、そして、それに先だち物事を読み取り——言語化し位置づけることによつて、人間の理性的能力がより明確に行為されるといふことです。つまり、言語によつてより確からしい概念的な思考が可能になっているわけです。そのような能力こそ人間を他の動物から区別する特徴的標識の一つでもあるわけです。言語そして言語による認識・思考を考えずに人間を考えることは極めてむずかしいといえるわけです。

以上の、言語が人間や社会に与えている二つの機能とその重要性、そして、社会や人間・個人についての一般的な考え方から、この三者の関係を表わすといえるであろう六つの関係を示すことができます。

つまり

社会なき人間を考えることは困難である

人間なき社会を考えることは無意味である

言語なき社会を考えることは困難である

社会なき言語を考えることは無意味である

言語なき人間を考えることは困難である

人間なき言語を考えることは無意味である

の六つです。

ここでは個々の関係についての論証は省略します。

ここで「困難」とは後者が前者の持つ機能を考えずに成立し難いことを表わしており、後者が存在するためには前者の何らかの機能が必要条件であることを示しています。

また、「無意味」とは後者が前者によつてその意味あるいは存在価値を決定されるものであることを示してお

り、前者が後者の意味を決めるうえで主体としての意味を持つてゐることを表わしています。

従つて、以上の六つの関係から、人間にとって社会と言語が、そして、社会にとつて言語がそれぞれ機能的側面から必要であり、人間は社会と言語の意味価値を決定する主体・主人であり、また、社会にも言語の意味を決定するうえである種の主人的性格を認めることができるということを表わしているわけです。

この事柄をさらに総合的に観ることによつて、次の関係を認めることができます。

つまり、本来、使用者たる主体——人間や社会——に従属することによつて意味を持つ道具——社会や言語——が、その主体——人間や社会——に用いられながら同時に、その主体——人間や社会——にとつて最も基本的・特徴的な機能を提供する場合、つまり、道具——社会や言語——の持つ機能が主体——人間や社会——の成立を考える上で欠くことのできない必要条件である場合、主体——人間や社会——は道具——社会や言語——の意味を決めるものでありながら、同時に、その存在が

その道具——社会や言語——の機能の制限下にあるということを表わしているわけです。つまり、この場合、主体——人間・社会——は道具——社会や言語——に対して絶対的な優位に立っているのではないということです。この関係は、人間・言語・社会の三者がいわゆる主客という関係ではなく、それぞれがそれぞれの存在にかかわる相互に依存しあい、規定しあい、機能しあうという三者によつて初めて構成される一つの関係概念、あるいは、構造的な概念としてそれぞれが対等、さらには一体化して存在していることを表わしているといえると思います。

ここに、人間・言語・社会の三者についてのこのような関係に対する視点の可能性が認められるわけです。そして、その視点が自分のこの研究の基本的視点であるわけです。

このような視点から言語を観るものとして言語についての社会学的考察の一つの立場が得られると思います。

次に言語が基本的に持っている構造について、現代言語学の創始者の一人、F・ソシュールの言語原理から観

てみようと思ひます。

ソシュールの理論の中でわれわれにとって特に重要な点は、言語が構造的存在であること、ソシュールの言語理論の基本的立場は社会的事実としての言語であること、言語記号における聴覚映像（音声）と概念の結合は恣意的であること、です。

ソシュールは彼の科学的言語学の対象としての言語を言語の中の社会的事実の側面、彼の用語でいうラング（langue）に限定しています。そして、そのラングを成立させるために人間の持っている生得的な普遍的潜在能力いわば言語の生物学的基盤としてランガージュ（langage）——言語能力を、そしてまた、現実に行なわれる日常の表現・発話・会話といった言語活動・言語事実をパロール（parole）とし併せて言語の構造として區別し示しています。彼のこの社会的事実としての言語という限定は重要な意味を持っています。例えば、彼の言語理論の重要な特性である言語記号の恣意性などはあくまで、ラングのレベルでの恣意性であり、例えばパロールはラングという既存の制度的言語の制限内で初めて成立す

るものであるからです。

この言語の恣意性、つまり、言語として表わされる聴覚映像（能記）とその表わしている概念（所記）との結合には自然的存在あるいは本質的なつながりの必然性がないということもわれわれにとって重要な意味を持っています。

この言語記号の恣意性ということには二つの意味を認めることができます。つまり、一つは先に示したような聴覚映像（能記）と概念（所記）の結合の恣意性であり、もう一つは概念——意味における区切りの恣意性ともいえるものです。前者は例えば、ある物について各国語の聴覚映像（音声）が異なり、どれかでなくてはいけないというものでないこと、ソシュールによれば「（言語）記号は、能記と所記のあいだに内在的連環が存在しないことにおいて恣意的である」ということです。後者は、われわれはあるものを名付けることによって、そのものを他のものから區別し、われわれの意味の世界の中に位置を与えているわけですが、そのあるものとして認識する範囲が必ずしもそれ自体絶対的単位として共通で

はなく恣意的であるということです。ソシユールによれば「それぞれの言語が世界を異ったふうに分節もしくは組織する。言語は単にすでに存在する範疇に名称をつけるのではなく、言語自身の範疇を分節するのである。」

つまり、ある語は他の語との違い・区別によって位置づけられその違いはある見方に基づき、その見方が恣意的であるわけです。そしてこの区分の違いはその語と結びつく別の語の範囲に影響を与え、さらに文の構成を通してその言語を用いる人間の思考にまでも影響を与えると考えられます。アメリカの言語学者で言語相対論を唱えたB・ウォーフは「個々の言語体系は単に観念を表わすための道具であるだけでなく、それ自体観念を型どめるものであり、われわれは母国語によってつくられた線にそって自然を分割する」といい「もしアリストテレスが（アメリカ・インディアンの一種族）ポピ族の言語で考えたなら、彼の著作を書かなかっただろう。」といっています。つまり、ある言語はその固有の世界観・意味体系と一体化して存在しているわけです。しかし、先に示したようにこの恣意性はラングのレベルでのものであり、

個人の言語行為のレベルでは必ずしも認められないとされています。この限りで言語は一つの社会的制度として存在しているといえるでしょう。そのような言語の意味をここでは辞書的意味といおうと思います。これは、ある言語集団の中で通用することの保障された、つまり、言語の伝達機能に基づく意味といえるでしょう。それは辞書に書かれているようなある事柄の意味として妥当性を認められる、より一般的な、主観を除いた最低限の抽象的・特徴的な分析的なものといえると思います。

しかし現実の語にはそのような辞書的意味の外側により全体的・総合的にそのものを表しているものと認めることができます。例えば「春」という語は「はる」「春」（田畑を「墾（は）る」意。または、気候の「晴る」意からか。草木の芽が「張る」意からともいう）四季の最初の季節：等」というような内容を辞書に持っているわけですが、われわれは「春」という語について、他にも多くのイメージ・状況・情景など、そしてさらにはそれぞれ独自の経験など、意味あるものを思い浮べることができ、それぞれの人にとって、その内容も「春」という語

の意味するものであるわけです。また、文・語のリズム・イントネーション等といったものにも、それなりの表意機能を認めることができると思います。

このような意味は、辞書の意味の社会的なものに対して、個人的なものといえると思います。そして、この語の意味の個人的なもの、いわば個別的な広がりがあるが、現実の言語行為における語の結合や文の表現において思考に個々の語の意味を越えたより全体的・自然的な意味を表わし得る背景となっており、それによって個々の語の意味の範囲を越えた統一に基づく微妙な表現が可能になるのではないのでしょうか。

勿論、このような言語の使用は辞書の意味に比べて一般に明確さを欠くものであるわけですが、現実にはおそらく辞書の意味とは違ったタイプの妥当性に基づく明確とはいえないまでも同一傾向の方向性を認めることができると思います。だからこそ、言語による独自の意味世界の創造―詩や小説が存りえるのではないのでしょうか。

そして実は辞書の意味も、語のこのような現実の使用に基づいて決められたものであり、それは現実の使用に

基づく抽象物であるわけです。従って、現実の言語の意味を決めるものとして辞書以前に存在する者として言語の使用者が重要な意味を持っているといえるのではないのでしょうか。

つまり、われわれの現実の言語行為は一方の極に伝達機能に基づく通用の必要から言語の社会的意味である辞書の意味を持ち、もう一方の極にそれは質的に異なる、むしろ全く対極する個人に基づく個別的・個人的なものを持ちその間に位置しているといえるでしょう。そして個々の言語行為においてその都度その位置を決定することのできる意志は、その行為者である個々の人間の意志以外には考えることができないわけです。

言語が何を表わそうとするか、つまり、何を意味するかは、その発話者である人間に依存しているわけです。勿論、その時その人間は、その行為する表現が彼の属する社会においてどのように理解されるか、そして、その理解が自分の目的、必要に比べるほどの程度のものかを考えて決定を下し行為するわけです。つまり、その人が現実に既存する社会制度的制限下で決定を下すわ

けです。決定を下し、制限を受けるのは言語行為を行なう者である人間であり、言語行為自体は、決定を下したり、制限を受けることのできないものといえます。つまり、言語は人間との関係において究極的には道具であるわけです。ただしそれは、あく、ことのできない道具であり、従って、人間・言語・社会の三者を考える場合、それらは一体的なものであるわけです。

この言語行為の主体として意味を決めるものとしての人間は、現実生存し、その生存に伴う種々の影響下にあるところの、単なる即自(物)でも対自(意識)でもない両義的かつ総体的判断・意味解釈の主体として、世界の中でその影響下に生存するものでありかつ、その世界に意味を与えていく人間——身体という概念に近いものといえると思います。